

裏面の話題

みんなの居場所の裏面を、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和4年5月13日(金)

みんなの居場所

雑感

毎年「ロールテンウィーク」(GW)前は、あれをいいたいことをいいたい計画を立てるのだが、ここ数十年、計画通りにならない。今年もそうだった。自分のための時間におおごころが、そもそも時間潰しなのかもいけない。6日金曜日「残り2日間は思い切りの楽しもう」と着意込むものの、日曜日の夜には思い切りの後悔する始末...

「これは何を意味しているのか」と考えてみた。詰まるところ、時間の使い方が下手というところではないだろうか。確かに「W」中も仕事のことを頭から離れなかった。何をしていっても仕事のことを考えていた。これで働ける方改革を伝えたいかなければならぬ立場にあり、本末転倒と言われかねない。確かに、学校現場は対応すべきことが多いことに加え、「コロナ禍が弊害」になってはいただかたうまい。

私自身、心に余裕をもちつつも、行動をコントロールしなげれば、難局で判断を誤るかもわからないと危機感を高めている状況だ。「コロナ禍がいつまで続くのか、見込みがけないが、収束するまでを祈りながら」そんな中でも学校人として何ができるかを考えて、子供達のために、地域のために懸命に活動していきたい。

「コロナ禍」まで致す「コロナ」

新型コロナウィルスには「3つの」感染症」という顔があることを知っています。第1の感染症「ウイルス」、第2の感染症「不安」、第3の感染症「差別」の3つです。第1の感染症は病気のものです。皆さんも新聞やメディアでもご存じの通りです。第2の「不安」については「クychin」や「無」いことが多くなることが多いことにあるものです。不安や恐れを感じて振り回されるという症状が出る、気づく力が弱くなり、自分を支える力を弱めます。不安によって人を遠ざける「コロナ」第3の感染症「差別」が起きます。3つの感染症は繋がって「正」負のスパイラルです。「このスパイラルの中で敵が替わってしまっているのです。本来の敵は「ウイルス」ですが、特定の対象を「見えない敵」として遠くける対象となるのです。負のスパイラルの中で、本当の敵を見なくなる、束の間の安心感を得てしまふ、それが「差別」なのだと思います。

そして「いざい」の感染症を防ぐためにどうするか。第1の感染症には「密回避」新しい生活様式の徹底、衛生行動の徹底です。第2の感染症を防ぐには、自分を「見つけ」ついでに自分になつていながら考え、安全や健康のために自分に必要なることを見極め、実行してみようです。そして、第3の感染症を防ぐには、「確かな情報」を収集・発信し、差別的な言動に同調しないことが大切です。

そして、「いざい」の時こそ頑張っているすべての人にねむらひの気持ちで敬意を払いたいと思います。日々生活を送って社会全体を支えている人は、私達自身でもあるのです。自分自身にも敬意を払い、元気に笑顔で「コロナ禍」を乗り越えていきたいと思います。

恩師の追憶

長洲勤務は初めての勤務ではあります。昔はお世話になった校長先生が住んでいらつしやいます。若かった私を社会人としてしっかりと指導してくださった校長先生です。私は当時20歳の歳で、まだ若さが故の職務に対する甘さが残っており、併せて教師という職業に対してどれだけの責任や県民からの期待が注がれているのかということも分かっていながら、たまたまに思います。我が教師の給与は、血税から支払われます。また、教師が教育活動で使う電費、水道、PC等々、それらもすべて血税で賄われます。そして、その感覚を教えたのでしたが、その校長先生です。

意を決して「自由においでなさい」といって、温かく迎えてくださった。心が温かくなりました。私は書道や音楽、当時校長先生にはお社として掛け軸をプレゼントさせていだいたのですが、それが未だに掛けてあったことに感動して、思わず写真撮影していただいたらいます。

初めての長洲勤務ですが、長洲町への縁を感じる時間となりました。人の縁とは不思議なものです。これを繋いでいくのです。大切にしたいと思います。

シリーズ「自分を語る」④

さて、フルに到着。昭和40年代、近所にフルもあつた時代です。このフルは「新地フル」と呼ばれていました。他にも有名な「中野フルセンター」(数年後「サンビアン」にもフルができましたね(今のサンビアンにはフルがありません)と、子ども達は知らない出来事です。最近温暖化施設でフルが併設されるという状況があるようです。話が反れましたので、元に戻しましょう。

新地フルでは、私の友達ともひび君とその家族に会うことができた。少しづつフルが見えてきたよな気がして、いきました。ともひ君はフルについて時間が経っていなくなつたらしくフルで遊んでいました。私達兄弟は水着を持っており、外からボートと眺めていたことを思い出します。ともひ君のお母さんは私達に気を遣ってアイスクリームをくれました。喉が潤いて、しかも暑い夏の時期で、とても美味しかったです。ともひ君のお父さんが、私達を再度坪井まで送ってくわねることに決まりました。もう辺りは暗くなつていました。

一方、私の家族は大変だったようです。手掛かりがない井井に時間が過ぎていっているのだから。私達がいなくなると気が狂い、再会を約束するまで4時間程ですが、両親はいつも感心した話です。坪井に到着した私達兄弟は、伯母夫婦の家に灯りが点いているのを確認して、「おはちゃんかおはちゃん」と叫んで、走って中に入りました。私達を見たおはちゃん「おはちゃん」と叫んで、「おはちゃん」と怒鳴り、それを聞いた母が泣きながら現れました。弟も泣いていて、私はなせみな泣いてたのだからと不思議に思った光景でした。今考えてみれば、当然泣くことになるのですが、当時そんな理解力の無い私達「おはちゃんかおはちゃん」...「おはちゃん」の感覚だったみたいです。全く人騒がせな澤田でした。

お巡りさん達まで巻き込んだ「おたまたま劇」この後両親はお社に奔走するのですが、初めて私達の手を握り、家に送って頂いたあの「おじさん」だけは「おじさん」でも探さずいかにできず、数力月間探し回ったのですが、おれを言えなかつたみたいです。(ついで)